

伊達政宗公
誕生450年
シリーズ
第八回

政宗の人物像④

仙台市教育委員会文化財課長 長島 栄一

政宗の最晩年

伊達政宗は70歳を迎えた寛永13年（1636年）初めごろから、食事が喉につかえるようになり、同年4月18日に経ヶ峯において、国老の奥山大學に「死後ここを墓所とせよ」と命じ、杖を地面に立てたと言われています。

4月20日、参勤交代で江戸へ向かう際、家臣に「述懐す可からず。家の乱れむ基なり（自分の死後は昔のことに執着してはならない。御家騒動の原因となる）」と言い残して仙台を出発。これが仙台での最後の姿となりました。5月24日午前6時ごろ、江戸の上屋敷にてその生涯を閉じます。遺体は6月6日に経ヶ峯に埋葬され、廟が完成したのは寛永14年（1637年）のことです。

政宗廟「瑞鳳殿」の発掘調査

仙台市街地の西部、広瀬川河畔の経ヶ峯では、藩祖伊達政宗が瑞鳳殿、2代忠宗が感仙殿、3代綱宗が善応殿と称された廟所に埋葬されました。いずれの廟も第2次世界大戦下の昭和20年、仙台空襲により焼失しました。その後、に貴重な歴史遺産として再建の声が上がり、それに先立つ発掘調査が昭和49年から58年にかけて行われました。

副葬品から浮かぶ政宗の姿

瑞鳳殿の地下からは、遺体を入れた棺桶をのせた籠とともに、多くの副葬品が出土しました。遺体は仙台城下を一望する方向に向け、参拝者に背を向ける形で埋葬されていました。副葬品には太刀、脇差、具足などの武器の他に、時絵箱、鏡、硯、筆、鉛筆、日時計、金製ブローチなどがあります。戦国大名として武具類は当然としても、硯や筆などの文房具類は多くの手紙が残る政宗の個性をよく表しているように思



▶ 金製ブローチ
仙台市博物館蔵
保存状態の良さから、
政宗が大切にしていた
ことがわかります



◀ 黒漆葛時絵文箱
(発掘当時)
仙台市博物館蔵
中には、筆や文鎖など
が入っていました

えます。とりわけ鎧を入れた鎧櫃の上
に置いたと想定される皮袋の中からは、
日時計と金製ブローチが各々布で包ま
れた状態で発見され、大切にされてい
たことがうかがえます。日時計は携帯
用で、方位を把握する磁石にも使われ
たと見られます。また金製ブローチは
国外からもたらされたと思われ、その
経緯に興味が尽きません。

これらの副葬品は、武具類のみだつ
た2代忠宗、日用品などが埋葬されて
いた3代綱宗の副葬品と大きく異なり、
文武に秀で海外とも繋がりがある政宗
の姿が浮かんできます。

● 本稿では、学術研究の立場から歴史上の人名
に敬称を付していません
● 写真提供：公益財団法人 瑞鳳殿



発掘調査前（写真上）と再建
後（写真下）の瑞鳳殿周辺
発掘調査後、昭和60年ま
で全ての廟が再建されまし

